

天地

ネットワーク テーブル 430号

発行：天地シニアネットワーク／2016・8・16

「目 次」

T E N T I · T O D A Y		1
会員の広場 <セミの話題>		3
連載作品		3
隨 想	『資治通鑑』について（2）	赤羽 清志 3
隨 想	天のわざ、地のほまれ—地球を測れ、宇宙をはかれ— 7光速をはかれ	伊那 阿歩 7
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（5） <詩仙堂>	大竹 漠洲 10
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」「すどう美術館」	13
事務局		15

美容と健康維持に「アルガンオイル」

モロッコ女性の自立とサハラ砂漠の緑化を支援します

アルガンオイルは「健康と美容に良い」ということで注目されています。

92ml @1500円

T E N T I T O D A Y

終戦時、国民学校二年生でした。厳しい戦争体験はしていませんが、戦時の経験はあります。<戦争は決して国民に幸福をもたらさない>という思いが多くの戦時経験者にあると思います。その思いを、戦争を知らない世代へどのように伝えるか、簡単ではありません。身近な体験を伝えることも大事ですが、他人の体験を知ること、歴史を常に探ることも大事で、さらに大事なのはそれらを伝える事と考えています。

当初はあまり気乗りがしなかったのですが、参加を勧められて、今月初め、旧満州のノモンハン事件の旧跡を訪ねる研修旅行に参加しました。ハイラルにあった関東軍の主力であった23師団の本部跡（現在は、市庁舎として使われている）を訪ねた時のこと、モンゴル系中国人ガイドの白さんから、現地の古老の話として、終戦時に数百人の日本軍兵士が前庭に整列し、上官が機関銃で全員射殺、上官たちも自決したという、信じられないような悲惨な話を聞きました。

本来であれば戦争に全く関係ない人たちが、<・・・のため>と言われて自分の命を差し出さなければいけない事態、現代では異常です。戦争は、異常を正常とする麻薬のようです。

ノモンハン戦役遺跡陳列館、雑草生える平原にポツンと立っていました。引率して下さった早稲田大の小林英夫教授の、「ノモンハン桜」を見たいという要望に、陳列館の係りの男性がオートバイを走らせて草を1本とってくれました。樹ではなく草でしたが、そこに咲く花の姿は、桜のミニチュアのように見えました。きっと故郷に咲く桜に思いを馳せて、そう呼んだのではないかと、勝手に想像しました。

ノモンハンは、満州国と外モンゴルの境界にありましたが、現在では中国の『内モンゴル自治区』になります。北方ですから、涼しいのかと思って行きましたが、日中の暑さは厳しく、熱中症になりそうな状況でした。朝晩の気温はあまり落ちませんでしたが、冬は、マイナス50℃になるそうで、気象条件は厳しいところです。

戦闘は、1939年5月から9月までありましたが、最後の決戦は8月でした。当時から草原の砂漠化していたと思われますが、日本の歩兵部隊は暑くて足場の悪い中を、200kmも歩いて戦場に赴きました。戦場についたときには疲労困憊、最悪の状態だったようです。日本軍、ソ連・モンゴル軍、双方多大の損害を出しましたが、両国とも、報道を抑えました。最近、当時のヨーロッパの動向へ、第二次世界大戦への道に、ノモンハン事件が大きく関わっていたと注目する学者・研究者が多いそうです。

昼、夜と中華料理でしたが、冷たいものを飲む習慣が無いそうで、ビールを置いてない店が多いとのこと。ガイドの白さんが、事前に手配してくれていたので喉を潤すことができましたが、紹興酒も飲まないとのこと、白さん持参でした。中国が広いのを実感しました。



会員の広場

暑いですね。セミの話題がありましたので、反応しました。私の理解では、初鳴きは以下の通りです。(いずれも、首都圏の例)：

ニイニイゼミ : 初鳴き 7月10日ころ (今年は7月1日)
ミンミンゼミ : 初鳴き 7月20日過ぎ (今年は7月10日)
アブラゼミ : 初鳴き 7月20日過ぎ (今年は7月16日)
クマゼミ : 初鳴き 7月20日過ぎ (今年は7月16日)
ヒグラシ : 初鳴き 7月20日過ぎ (今年は7月16日)
ツクツクボウシ : 初鳴き 8月1日 (今年は、7月31日現在、まだ)
最近の傾向として顕著なのは、天下をとっていたアブラゼミの衰退と西日本のクマゼミの首都圏定着でしょうか。

私の好きなクラシック音楽の作曲家に例えると以下のようになります。

ニイニイゼミ : ハイドン (消え入りそうな鳴き声)
ミンミンゼミ : ベートーヴェン (華やか)
アブラゼミ : ブルックナー (地味)
クマゼミ : マーラー (派手に大音量で鳴らす)
ヒグラシ : ウェーベルン (短いフレーズで一つの宇宙を表現する)
ツクツクボウシ : モーツアルト (哀愁のこもった鳴き声)

セミとクラシック音楽の両方に関心のある人は日本国民の1%に満たないでしょうから、これはマイナーな話題です。 (尾関陽四)

連載作品

2016.7.9

『資治通鑑』について(2)

赤羽清志

参考 『China 2049 秘密裏に遂行される世界覇権100年戦略』

マイケル・ピルズベリー 2015.9 日経BP社

『中国4.0 暴発する中華帝国』

エドワード・ルトワック 2016.3 文春新書

『本当に残酷な中国史 大著「資治通鑑」を読み解く』

麻生川静男 2014.9 角川新書

『資治通鑑選』 中国古典文学大系 14

編石川忠久他 1970.8 平凡社

次は、主として『資治通鑑』による「陰陥な中国人の策略」である。

① 互いの妬みや恨みを利用する。

「2桃、3士を殺す」 齊の晏子は横暴なふるまいをする3人に褒美と称して2個の桃を与えた。二人は桃をとったが、3人目の功に劣ることを知り、恥じて自殺、3人目は二人が死んで自分だけ生き残ることはできないといって自殺した。晏子は、自らの手を汚すことなく3人を始末することができた。

陳平の「陽驚」 項羽に攻められた劉邦は穢陽城に籠城、項羽とその信頼の厚い范增の間を切り崩した。劉邦のところに項羽から来た使者を、わざと范増からの使者ごとく丁重にもてなしていたが、その後項羽からの使者であったと「陽驚」(わざと驚いたふりをする)し、ぞんざいな扱いに切り替えて、項羽の猜疑心を煽つという智謀・陳平の秘策。

② 高位者を利用して報復する。

「睚眥の怨みも必ず報ず」 些細な怨みでも忘れず仕返しする。

690年、王弘義（衡水出身）は隣の農家に瓜をねだったがくれなかつたので、役所に行って神からの使いである白兎が隣の畠にいると伝えた。役人たちちは早速白兎を見つけようと畠に入ったので、瞬く間に畠の瓜は台無しとなった。

③ 味方をも欺く。

「苦肉の策」 赤壁の戦いにおいて、正攻法では勝ち目がないと考えた呉の老将・黃蓋が、わざと周瑜の怒りをかい、鞭打たれて曹操に寝返る芝居を打ち、味方はそれを本気で信じ、敵の曹操の將軍たちもまんまと騙されてしまった。

BC279年、戦国時代、齊が燕から攻められたとき、武将の田單は籠城している人々を奮起させるため、わざと捕虜になった味方の兵士の鼻を敵に削らせたり、郊外にある自分たちの先祖の墓を荒らさせたりした。これにより籠城していた人々は皆怒り、戦闘意欲が最高に高まり、城の陥落を防いだ。

④ おだてて自滅を待つ。

寒山拾得の問答 ある日寒山が拾得に尋ねた。「人あり、我を侮り、辱め冷笑し、殴り、傷つけ、嫌い、憎み、怨み、欺かばこれをいかにすべき」と。拾得答えて曰く

「ただこれを忍び、彼に従い、譲り、敬して避け、耐え、聾啞を装い、取り合わず、冷眼でこれを観し、彼が如何にするかを看よ」と。

「招安、招撫」 政府は、山賊、馬賊、海賊などに対し、これらが手強い

と見るとこれを退治するのではなく、妥協し、利禄と官職をもって誘う。その妥協に応ずることを帰誠、帰順という。

「唾面自乾」 唐の賢人・婁師德 人が自分の顔に唾を吐かれても拭わず
に乾くのを待つ。腹が立ってもじっと我慢をして、敵が転ぶのを待つ。
老猾で辛抱強い。911年、燕の梶雄・劉守光は思いあがって尚父という高い

地位に就きたいと言ったので、晋王・李存勗は懲らしめようとしたが、
部下は「增長させて自滅するのを待つのが賢明」と進言した。己の力を過信して勝手に大燕皇帝を名乗った劉守光だったが過信がたたり帝位にいた
のはわずか2年で、李存勗に捕えられ殺された。

⑤ 表では友好を装い、裏では陥れる策を練る。

めったなことでは人を信用してはいけない、騙す方より騙される方が悪い
946年、五代十国、後晋の馮暉は大軍の敵・拓跋彥超と和平交渉に入った
が、馮暉の部下・薦元福は「敵は大勢いても精兵は少ない、和平に応ずる
ふりをして当方の疲れるのを待っているのに違いない」と見抜き、敵の弱
点を見つけて奇襲・突撃した結果大勝した。901年、五代十国、後梁の太祖
朱全忠は唐の節度使王重栄に投降したが、王重栄は見所があるとして殺さ
ず、伯父・甥の関係を結んだ。朱全忠は、将来自分が高位についたら王氏
みんなに恩返しをすると誓った。時移り王重栄の養子・王珂と朱全忠は対
立した。王珂は朱全忠の部下・張存敬に休戦を申し入れ、降服の交渉に入
った。朱全忠は王重栄の墓に詣で、哭礼の儀式を行い、王珂を安心させ都
に上り唐の天子に会うよう勧めたが、一方でひそかに人を遣わし、王珂の一
行を皆殺しにした。その後朱全忠は、唐の19代皇帝昭宗を暗殺、その子哀帝を帝位に就けたのち禅讓を迫り、梁を建国し帝位に就いたが息子の
朱友珪に殺された。

⑥ 奸計で無実の人を陥れる。

「上兵は謀を伐つ、その次は交を伐つ、その次は兵を伐つ、その下は城を
攻める」(『孫子』)。敵の計略を挫く策略を巡らす頭脳作戦が上策で、兵を
繰り出して戦争をするのは下策である。

陳平は漢の建国に多大の貢献をした。劉邦から莫大な機密費を貰い、
秘術を尽くして敵を攪乱、死ぬとき「あまりに多くの陰険な計略を使つ
たので、きっと子孫は没落するだろう。」と予言した。

戦国時代、齊では騒忌と田忌は犬猿の仲であった。これを知った公孫闐は
騒忌に方策を授け、魏に戦争を仕掛けることを勧めた。当然戦争に出かける
のは田忌であり、勝った場合は提言した騒忌の功績となり。負けた場合は田
忌が責任を取る(戦死あるいは処刑)ことになる。

毛沢東の文化大革命 刘少奇などの数名の政敵を倒すために、数千万人の罪のない人々を巻き添えにした。唐の医者、鄭注は、徐州の将官を治療

した縁で出世、節度使の李翹に紹介され警察長官にまでなったが、自分の過去がばらされることを恐れ、将官の隠し事を李翹に告げ口をしたので、将官は捕えられ殺された。恩を仇で返した。

882年、唐は黄巢の乱で大混乱、残虐極まりない捕盜使の楊行遷に対し阡能らが反乱を起こした。楊行遷側の敗色が濃くなると、彼はその責任を取られされることを恐れ、近くの村人を捕まえ捕虜と偽って、毎日数十人から数百人を役所へ送った。彼の上官の陳敬瑄は内実を知っているながら知らないふりをして捕虜を全部切り殺した。

⑦ 面子を守るためには、不正・不義も断行する。倫理に外れた行為が推奨される。

BC148年、前漢の6代皇帝・景帝は竇皇后が溺愛した弟劉武に死後帝位を譲ることを約束したが、家臣の袁盎は制度上帝位は直系の息子の劉徹（武帝）が継ぐべきであると反対した。腹を立てた劉武は袁盎を殺した。部下の調査では劉武の有罪が明らかであったが、調書は表に出さず臣下を実行犯にでっちあげて処刑、劉武は無罪、皇后はじめ皇室全体の平和のために面子が法律より勝ることとなった。

535年　渤海王・高歛の世継ぎである高澄が父（高歛）の留守中に父の妾の鄭氏と密通、高歛が戻ってくると、ひとりの下女が告げ口をし、二人の下女が証言した。高歛は怒り高澄を鞭打ち・幽閉、その母親の婁妃も叱責された。高澄は司馬子如に助けを求めた。司馬子如は高歛に会い、「こういった醜聞は隠しておくべきである。婁妃とその一族の恩は深い。妾ひとりなどゴミ、下女の言うことなど真に受けるとはなにごとですか。」と言い、ふたりの下女の証言を覆させ、告発した下女に自殺を命じた。密通はウソであったことにされ、高歛の親子、夫婦関係も元通りとなり、司馬子如は酒席と高額な謝金で遇された。毛沢東時代、政治局員・康生の義妹・蘇枚が自殺、共産党では自殺が許されていないので、康生はこれを他殺事件とし50人以上を逮捕・投獄した。これによって康生の面子を保った。

⑧ 権道一義を貫くためには汚い手段も辞さず。

権道＝手段は常道に反するが結果は道理にかなう、やむを得ず使う超法規的手段。

後漢の安帝は幼少時聰明だったので鄧太后が帝位に就けたが、成長するにつれて横暴となり太后と対立した。太后の崩御後、その反対派は太后の兄弟の悪事を密告したので、安帝は怒って太后兄弟の一家全員の爵位を剥奪し都から追放、皆に自殺を強要した。大司農・朱寵は死を覚悟で安帝の判断の誤りを指摘、最終的に安帝は判断ミスを認め、生き残っていた鄧兄弟親族を全員都へ呼び戻した。

衛の公子・州吁が兄の桓公を殺して王位に就いたが、政治基盤が不安定であったので臣下の石厚に策を考えるよう命じた。石厚は父親の石碏に尋ねたところ、陳侯に頼んで周の天子にお目通りすれば箇がつくと教えられた。州吁と石厚が陳に出かけたので、石碏はこっそり陳侯に使者を送り、この二人は主上殺しの逆賊であるので殺害してほしいと依頼した。石碏は、わが子の石厚を犠牲にしてまで州吁を殺し、天下に義のあるところを示した。

BC595 年、小国の大宋が大国の楚に攻められたので、宋は晋に救援を求めた。

晋王は使者・解揚を宋に送り、「ともかく楚に降服するな。そのうち国を挙げて救援に向かう」と伝えようとしたが解揚は楚に捕まってしまった。楚王は解揚に逆のことを言えば褒美をたっぷりとらせるともちかけたが、解揚は拒絶した。3 度目の説得でようやく解揚は同意した。しかし宋の陣営に向かつて喋られた時には元の言葉のままを伝えた。

楚王は約束を破った解揚を殺そうとした。解揚は「王が適切な命令を出すことを義と言い、臣下がそれを忠実に実行することを信と言う。一旦命令を受けたからには、二股をかけずに実行するのみで、死ぬことはあってもその命令は忘れない。ましてや買収されることなどありえない。」と言った。解揚は楚王との約束に違反したことになるが、当時の倫理観では誉めるべきであるとされ、楚王は解揚を殺さなかった。

213 年、三国志時代 魏の冀城が馬超ら 1 万人の軍勢に攻められた。冀城から救援を夏侯淵に求めようと使者・閻温が出たが馬超に捕まつた。馬超は閻温に城に向かって「救援はもう来ない」と言わせようと説得したが、閻温は「援軍が 3 日以内に到着するので辛抱せよ」と叫び、「君主に仕えるということは死んでも二心を抱かないことだ」と言ったので、馬超はとうとう閻温を殺した。
(つづく)

天のわざ、地のほまれ

— 地球を測れ、宇宙をはかれ —

伊那 関歩

7. 光速をはかれ

21 世紀の現在、小学生なら誰でも、光のスピードは秒速約 30 万 km : 1 秒間に地球を 7 周半まわることができる速さであることを、誰もたしかめたわけではないが、常識として知っている。光速が有限であると言いだしたのは、古代ギリシャの哲学者エンペドクレス (BC 430 頃) だそうである。かれは「火、水、土、空気」の 4 元素を万物の根源 (リゾーマタ) とする 4 元素説を唱えたことによってよく知られている。

一方アリストテレス (BC 384–322) は 4 元素とは別に「熱、冷、湿、乾」から成る 4 性質説をとなえたが、どうひいき目にみても牽強付会としか言いようがない冴えない説である。さらに、かれは、光は瞬時に伝わるものと考えていたようである。光速は有限であるというのは、むしろ例外的な特殊な見解であったであろう。なにしろ確かめようがないのであるから、エンペド

クレスも確信があるわけではなかったのだ。

なお、光のスピードをここでは「光速」ということにすると、世間ではどちらかというと「光速度」のほうが一般的のようである。物理学では「速さ (speed)」と「速度 (velocity)」は厳密に区別しなければならない物理量なのだ。このことについては後の回で詳しく述べるつもりである。一方、音のつたわる速さは「音速」といい「音速度」とはいわない。

光速は無限であるという一般的なコンセンサスは、近代にいたるまで引き継がれた。ガリレオ・ガリレイ（1564–1642）と同時代に生きた天文学者ヨハンネス・ケプラー（1571–1630）や「コギト・エルゴ・スム（われ思うゆえにわれあり）」で有名な哲学者、数学者ルネ・デカルト（1596–1650）も光速は無限であるとして何の疑いも抱かなかつたらしい。

もしや、光速は有限なのではなかろうか、と考えたのはやはりガリレオであった。かれは、ふたつの山の頂上（約 1.6 km はなれていた）で灯をともし、行きかう光の費やした時間を測ろうとしたが無駄であった。実験は徒労におわったのだ。「光速は途方もなく速いのです。いわば、瞬間的というべきです」と述懐した記録が残されている。ふたつの山頂が 3 km はなれているとしてもその間を一方から一方へ飛ぶ光かかる時間は、100 万分の 1 秒！ 当時、そんな時間を測れるセンサーや時計など存在しなかつたことは言うまでもない。

ガリレオは、光のスピードは有限であるにちがいないと予想しながらも、生涯それを実測することはできなかつた。しかしながら、かれの発見した木星の衛星たちが、やがて光速測定の手がかりを与えてくれることになるのだ。ガリレオの死後、木星のガリレオ 4 大衛星の観測は、ヨーロッパの天文台で続けられていた。パリ天文台長であった天文学者ジョヴァンニ・カッシーニ（1625–1712）は木星が自転していることと、ガリレオ衛星の公転周期がふらついている（一定していない）ことを発見していたが、かれの興味は土星に移り、土星の衛星テティス、ディオーネ、レア、イアペトス（いずれもギリシャ神話の神々）を発見した。さらにかれは土星の環をくわしく調べ、環の中央に空隙（カッシーニの空隙）が存在することを発見していた。

なお、木星第 5 衛星アマルティア（ゼウスの乳母）が発見されたのは 1892 年、ガリレオが 4 大衛星を発見して 380 年後のことであった。木星の衛星はヴォイジャー I, II など宇宙探査機の助けもあって、現在（2016 年）67 個発見されている。今まさに NASA の木星探査機ジュノーが木星周回軌道に乗ったばかりであり、これから木星の大気の構造や新しい衛星の発見など木星に関するニュースが次々に入ってくることであろう。

1676 年、デンマークの天文学者オーレ・レーマーは、カッシーニが行った衛星イオの公転周期についてのデータを整理するうち、たいへん興味ある事実に気がついた。まず、地球が木星に近づきつつあるときは、イオの公転周期は短くなる。そして木星—地球—太陽がこの順序で一直線に並ぶとき（木星が衝の位置にあるとき）地球が木星に最接近するあたりで、イオの公転周期はガリレオの観測値と一致する。やがて地球が木星から遠ざかっていくときには、公転周期が長くなるのだ。この現象については、カッシーニがすでに気付いていたらしいが、レーマーは、地球が木星に近づきつつあるときと

遠ざかりつつあるときそれぞれで、イオが木星のまわりを 40 回転する時間を測定してみたのだ。その結果、地球が木星から遠ざかりつつある時のほうが 22 分も余計に時間がかかっていることを見出したのである。これはいったい何を意味するか？

レーマーが観測したのは、じつは地球が木星に近づいたり、遠ざかったりするときに生ずるドップラー効果だったのである。レーマーはこの観測結果に満足してしまい、それがたいへん重要な意味を持っていることには気がつかなかつたようだ。レーマーの観測値を用いて光速の計算が出来ることに気がついたのは、オランダの物理学者 C. ホイヘンス (1629–1695) であった。しかしながら、かれはたいへんな誤解をしていて、レーマーの得た 22 分は、地球が太陽の周りを回る公転軌道の直径を光が通過する時間であると単純に考えてしまったのだ。つまり、光は太陽－地球間の距離 1 億 5 千万 km を 11 分で通過するとしたのだ。得られた結果は、秒速 22 万キロメートルであった。

レーマーの観測データを綿密に検討しなおしたのは、あの偉大な物理学者アイザック・ニュートン (1642–1727) であった。かれはその著書『光学』のなかで、太陽－地球間を光が通過する時間は、7–8 分であること、その値を使えば、光のスピードは秒速 235,000 km から 270,000 km の間になると述べている。

レーマー、ホイヘンス、ニュートンらの観測や研究によって、光速を求める手がかりが得られ、光は非常に速いが光速は有限であることがわかつてきたのだ。レーマーが得た結果を用いて、ドップラー効果の公式によって正しく計算すれば、光速と地球の公転速度との比を求めることが出来たのである。地球が太陽の周りを回る速さ毎秒 30 km を知っていれば、光速 $c = 279,000 \text{ km/s}$ となってかなり精度の高い値が得られていたはずであるが、如何せん、ドップラー効果が発見されたのは 200 年も後のことであった。

その後、1849 年、フランスの物理学者アルマン・フィゾー (1819–1896) は A 地点に光源を置き、高速で回転する歯車の歯と歯の間に光を通し、B 地点においた鏡に反射させて、戻ってきた光が同じ歯と歯の間を通り抜けるかどうかという方法で光速の測定をおこなった。かれはモンマルトルと 8.633 km 離れたシュトーヌ間でこれを公開実験したという。もし戻ってきた光が歯と歯の間を通らず、歯に当たったとすれば、光速の計算ができる。フィゾーの得た結果は、 $c = 313,000 \text{ km/s}$ であった。1850 年、同じくフランスの物理学者レオン・フーコーは歯車のかわりに高速で回転する鏡に光をあてるという方法によって光速を測定し $c = 298,000 \text{ km/s}$ をえた。

現代に至って、光速はマイクロ波やレーダーの最新技術を駆使して精密におこなわれている。原子時計の発展もこれにおおきく寄与しているのだ。現在もっとも信頼できる光速の値は、このシリーズ第 2 回にあるとおり、

$$c = 299,792,458 \text{ メートル/秒}$$

となっている（この数字を ニククナクフタリヨレバイツモハッピーと覚えるのだそうだ）誤差は約 1 メートルであるという。

ところでドップラー効果というのは、現代社会においては、たいへんじみ深い現象として知られている。救急車が近づいてくるときには、警告音がけたたましく高い音として聞こえるが、それが遠ざかっていくときには、急

に音波の振動数がさがるということを、我々は度々経験して知っている。あの現象が音波によるドップラー効果なのだ。この現象を発見し、その謎を解き明かしたのが、オーストリアの物理学者クリスチャン・ドップラー、1842年のことであった。現代の車社会では、車のスピード違反摘発のためにドップラー・レーダーが使用されて、車を運転する際、つい（油断して）お世話になったりする。

宇宙空間のはるか彼方にある星や銀河が地球に近づいているか遠ざかっているかは、それら天体が発する光のドップラー効果を観測すれば、いとも簡単に知る事ができる。たとえば、宇宙が膨張していることも遠くの銀河が発する光の波長がドップラー効果によって引き伸ばされて（天体が本来のものより赤っぽく見えて）いることが観測されてよく知られるようになった。

われわれ人類が住む天の川銀河のすぐ隣の（と言っても230万光年離れている）アンドロメダ銀河は、超スピードで天の川銀河にちかづきつつあることが、ドップラー効果の観測によってわかっている。この宇宙で銀河同士の衝突は珍しいことではなく、かなり頻繁におこっていたらしいのだ。天の川銀河も、このような衝突によりマイナーな銀河をいくつか吸収合併してきた証拠が見いだせるそうである。

レーマーは、地球の公転運動がひきおこすドップラー効果を木星の衛星イオを使って観測し測定したのであった。地球が木星に近づくときには、イオの木星のまわりの公転周期は短くなり、遠ざかるときには伸びるのである。つまり、ガリレオが発見した「天の時計」は地球の運動によってかなり狂うということが分かった。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（5）

大竹 漢州

東山の古刹・詩仙堂

京の古刹が多く残っている都の北は、洛北と呼ばれています。都の外周は東山・北山・西山の峰々で囲まれて、外敵の侵入を防ぐ役割を果してきました。御所を中心とした市街地を洛中、周囲を洛外とも分けています。周囲の峰々のある土地は、洛東 洛北 洛西 そし洛外の南を洛南と称しています。洛北の険峻な峰は、防御壁であったと共に、狭い山峡は外部と繋ぎ、人的、物的に重要な交通路でもありましたし、「山中越」は比叡山を越えて、琵琶湖から近江に出て、東海道から奥州に至る広大な地域と繋がった街道の出入口の役割を果していました。

又、洛北の古寺、三千院、寂光院に通じた大原街道、鞍馬寺を抜ける鞍馬街道は、越前と若狭の海に至りました 更に鷹ヶ峰の長坂口は丹波へ抜けっていました。

洛北の地には、平安期から今日まで数々の由緒ある古寺が護られてきました。緑が濃くて鮮やかで、洛中の寺院とは雰囲気を異にしています。旅は洛北の入口「一乗寺の下り松」にある古寺詩仙堂、園光寺、曼殊院を訪ねます。その後、大原街道の三千院、寂光院を夢の中で追体験したいものです。

車は川端通を「一乘手下り松」に向かって北に走っています。左側の鴨川

を遡っています。賀茂川と高野川の合流点の出町柳が近づいてきました。

高野川の上流が大原の里です。思い起こすと「一条守下り松」に行くには、大変不便でした。川端通には四条大宮まで大阪から京阪電車が、地上を走っていた時代でした。足は京都駅からバスに乗って直接に行くか、旅人の好きな叢山電車・叢山本線に出町柳で乗り換えて、一乗寺で下車して歩くか、の何れかでした。未だ若かったので、後者を常に選びました。今は大変便利になりました。車は間もなく「一乗手下り松」に着きそうです。

余談です。「一乗寺」と言う寺は、今日ありません。10世紀終わり頃までは、三井寺の別院として存在し「いました。後に一条天皇中宮であった藤原彰子（上東門院）の御願寺となって以降栄えます。しかし京の寺院が背負った定めを「一乗寺」も負いました。三井寺のライバルの延暦寺の衆徒に依つて焼き滅ぼされましたが、直ぐに再興されましたやはり三井寺の面子に関わったのでしょうか、その後の南北朝分裂期に、北朝の細川軍に依つて、再び焼かれ、その後、再興されることはありませんでした。

「一乗手下り松」の地名が、人々に強く記憶されているのは、吉川英治者「宮本武蔵」の中で、武蔵が吉岡道場の面々と決闘した場所であったからに違いありません。旅人は古寺を巡った帰途に、「一乗手下り松」の隣にある和菓子屋で、土地の銘菓とお抹茶を飲むのが楽しみです。和菓子屋の主人から聞いた話ですが、この「一乗手下り松」は、比叢山の清域と俗界との結界の松でした。旅人は、比叢山の聖地に足を踏み入れます。

この道を歩いた元気な頃のことを思い出しています。一乗寺駅から「一乗寺下り松」までは、緩やかな上り坂ですが、結界の下り松から上は、急な上り坂に変わりました。急坂を直進すれば、右手の竹林が詩仙堂の寺域です。手前の四つ辻を左に折れ、曲がりくねった風情豊かな路を進むと園光寺が、更に行くと曼殊院門跡に至ります。散策として最高です。

詩仙堂であることを示す木札「小有洞」の門を潜って、竹林の中を歩いて、石段から見上げると「老梅閣」の門の先が玄関です。丈山翁が59歳から亡くなるまで、30年間もの時を掛けて、風雅の極みを再現した世界です。玄関の前に立ち見上げると、威圧される様な建築物です。最上階は「嘯月楼」と呼ばれて、風流人が月と酒を愛でて、和歌を詠んだ楼閣です。

今日、詩仙堂は禪宗曹洞宗派に属した寺院で「丈山寺」が正式寺名です。入口門の木札の「小有洞」の文字が暗示していたようです。最初から余談で夢を破りました。

以前は勿論のこと隠者の館でした。江戸時代初期の武士、石川丈山が、その詩仙堂の主人でした。徳川家康の旗本一騎として大坂夏の陣に出陣しました。しかし軍令違反の罰で追放の身となり、家康の元から離れて武士の身分を捨て、儒学を学び直して、後に儒学者として大成する人物でした。

広島の浅野家から招鶴を受けていましたが、母が亡くなった機会に浅野家を辞し、この地に丈山翁の建てた草庵が、本来の詩仙堂です。

先に書いた様に、今日の詩仙堂の寺名は丈山寺と変えて、曹洞宗派の寺に属した昭和期以降の事です。「嘯月楼」の玄関口から入って、右手（西側）には瓦敷の仏間と六畳、奥が八畳の座敷で、左手が詩仙の間（詩倦の間）・の造りです。寺名の詩仙堂は、狩野探幽の手で描かれた中国の詩家36人の肖像

画の掛かっている詩仙の間に由来しています。旅人は吟詠が趣味です。好んで吟じる漢詩は李白、王維です。李白と王維の肖像画が、迎えてくれるように見下ろしています。丈山翁が造営した建物で残っている部分は、「嘯月楼」と「詩仙の間」のみです。丈山翁の思想が伺える貴重な文化財です。

余談です。本来、丈山翁は草庵を詩仙堂と称していません。正式な草庵の名称は「凹凸窓」です。中国明朝の士大夫たちが好んで作庭した「凹凸窓境」に由来しています。しかし丈山翁の仲間の風流人たちが、遊び心を起こして、詩仙の間から詩仙堂と呼び始めたのかも知れません。

詩仙堂の庭は、上・下二段から成っている唐様で、中国明朝で流行した「凹凸窓十境」を例えにして説明されています。正式な寺名が「凹凸窓」であることを知る人は、余り多くはありません。

逸話は勝手に広がります。大阪の戦で駆け抜けした科で放逐の身と成った丈山は、家康から秘密の任務を帯びて、この地に草庵を構えとも言われています。近江から東海道に抜ける山中越にも近く、高台にある「嘯月楼」の三階から御所の動向を監視するスパイであったとも言われています。

季節盛りの詩仙堂には、観光客が多くて閉口します。眺望の良い広い前庭の詩仙の間には、観光客が座敷の角まで座り込んで、入り込む隙間を探すのも大変な混雑です。何時も右端の手水鉢前が、旅人の定席です。今朝は到着が早かったので、未だ訪れる人は少なく、何時もの定席では無く、幸いにも詩仙の間の中央から、久し振りに正面で180度広がる庭全体を目にすることができました。詩仙堂は、何時来ても物静かな人の姿があります。詩仙の間に座り前庭を見詰め自然の音を耳にして、心の安らぎを求めている姿です。

学生時代からの記憶を辿ると、訪れる人の少ない時期は、厳寒の冬日か、油照りの真夏日しか無かったようです。しかし京を愛する人たちにとって、詩山堂は聖地です。大事にしたいものです。庭を巡ると、些細な政も忘れさせてくれる高雅な文人好みの庭造りに出会うことができます。既に庭園の造作が寺名の「凹凸窓」の由来になっている事は書きました。「凹凸窓」とは凸凹した土地に建てた住居を言います。建物は高い位置にあります。詩仙堂の庭は決して大きいわけではありませんが、この高低差を巧みに活用して東山の山肌から自然に湧き出す造り水を庭に引き入れて、変化を与えています。

風雅の道を極め到達した境地が、上・下二段構の作庭方式でした。詩仙堂庭園の鑑賞には、丈山翁の作庭意図を知ることが大事です。一つ目の眺めは、詩仙の間から庭を觀賞する事です。

間に座れば、庭の遠景には楓の林が、中景には丸く刈り込まれたサツキと楓が鮮やかな色彩で秋の終わりを表しています。近景に枯山水で表現された海があります。二つ目の眺めは、下の庭から建物「嘯月楼」と調和している植栽を見上げることです。代々の住職が丹精を込めた数多くの植栽が見事です。園芸植物から山野草まで、二十四節季の変わり目に、必ず美しい花々を愉しませてくれる住職の心遣いに、丈山翁と変わらない氣概を感じまた。下庭の片隅に佇んで、多彩な紅葉に彩られた風景に見入っていると、何処からかゴーン、ゴーンと心地よい響きが伝わってきます。観光客に「もう交代です」と告げる音の様にも聞こえます。猪や鹿を脅す「鹿おどし」ですが、詩仙堂では僧都(添水)と呼ばれているそうです。

余談です。未だ、秋と春の観光時期には、何処も人々で混み合います。時は金なり。次の圓光寺に急ぎました。

(つづく)

文化講座・講演会・美術展

奈良興福寺文化講座 28年8月25日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講

講演：「西洋建築から見た興福寺三重塔・5重塔」

そのⅠ：西洋建築と日本建築の違い

講師：千葉県文化財保護審議会委員 丸山 純

午後6時40分～7時・・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学) 文化学園 文か服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第73回 新三木会講演会のご案内

終戦後71年、今や往年の現役兵生存者も90歳を超え少なくなったが、約300万の同胞を失った禍根は未だ消えることはない。

GNP比12倍の相手国力を顧みない、軍事戦略不在の無謀な戦争は、いかなる国策・制度のメカニズムのもとに始められたのであろうか。

1. 日時・会場 8月18日(木) 13:00～15:00 如水会館、スターホール

2. 演題・『アジア・太平洋戦争—日本の国家戦略と国策決定過程の特質』

3. 講師 吉田 裕 氏 一橋大学大学院社会学研究科教授

4. 会費:2000円 婦人1000円(如水会員は2千円)、学生無料

5. 申込・E-Mail: shinsanmokukai@gmail.com (一般・紹介者)

6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

7. 予告: 9/15, 第74回 泉 三郎 米欧亜回覧の会・会長

『近代日本の曙—岩倉使節団』

10/20, 第75回 橋本 宏 元シンガポール、オーストリア大使
沖縄担当特命全権大使

『沖縄の米軍基地—安全保障と歴史認識』

11/17, 第76回 小平龍四郎氏 日本経済新聞社 論説委員
『どうなるか、EU離脱後の英国・EUの行方』

すどう美術館

〒250-0853

神奈川県小田原市堀之内 110-2 ベルデュール 103

◆電話、メールは変わりありません◆

Tel 0465-36-0740 Fax 0465-36-0739

メール info@sudoh-art.com

ホームページ <http://www.sudoh-art.com>

移転後ご無沙汰しておりましたが、ようやく落ち着き、今月から箱根の新しいスペースで、コレクション展を行うことになりました。下記お知らせの他、詳細の行き方などはホームページに掲載しております。

菅創吉展＜すどう美術館 コレクション＞

会期 ~9月30日(金)

開館時間 10:00~17:00(最終日 ~17:00) 火曜定休

入館料 500円(小学生以下無料:保護者同伴)

会場 箱根芸術空間 風伯

〒250-0311

足柄下郡箱根町湯本540-4

Tel 0460-85-7440

事務局

＜事務所までの道のり＞

場所: 〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号
(電話・FAX番号: 03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

① JR御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、

② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと(都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

＜投稿歓迎＞＜図書の推薦依頼＞

＜プリント版・郵送＞

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくださいれば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

＜振込先＞振込先: 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・430号

発行：2016年8月16日

：天地シニアネットワーク事務局（津田 爭人）

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室

TEL・FAX 03-3837-0290

E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp

URL <http://www5a.biglobe.ne/~tenti/>